

フランス・ヨーロッパの言語学におけるモチベーション
その理論、方法論と成果
La motivation linguistique en France et en Europe
Théorie, méthodes et résultats

フィリップ デルジューディチェ
Philippe Del Giudice
コート・ダジュール大学、CNRS、BCL、フランス
Université Côte d'Azur, CNRS, BCL, France
philippe.del-giudice@univ-cotedazur.fr

ふらんぼー(Flambeau) vol.48 2022, p.10-31.
原稿受理 2022-10-30 ; 最終版 2023-01-30

抄録

本稿の主な目的は、言葉の有縁性(モチベーション)の概念を、フランス語・オック語と日本語の事例を通し、日本の学界に紹介することである。ここ数十年で、モチベーションの研究は言語記号の理論的アプローチを一新した。とりわけ、方言学と語源学の分野に強い刺激を与え、大規模な学際的プロジェクトを発展させてきた。

Résumé

L'objectif principal de cet article est d'offrir au public japonais une présentation générale de la notion de motivation sémantique (à travers des exemples en français, occitan et japonais). Au cours des dernières décennies, ce champ de recherche a permis de renouveler l'approche théorique du signe linguistique. Il a surtout fortement stimulé la recherche dans les domaines de la dialectologie et de l'étymologie, aboutissant à des projets transdisciplinaires de très grande envergure.

キーワード

モチベーション、有縁、動機、方言、語源

© ふらんぼー Flambeau 48 (2022) pp.10-31.

183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 東京外国語大学フランス語研究室
183-8534 French Section, Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1
Asahi-cho Fuchu City, Tokyo

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY)下に提供します。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>



1. はじめに

ヨーロッパでは学者達が数十年前から言語記号のいわゆるモチベーション(有縁性)に感心を寄せてきた。なかでも特にフランス人が理論的な枠組みの構築に重要な貢献をもたらした。現在でもモチベーションを中心とする研究は盛んであり、それを使用する方言学者・語源学者が欧州の各地にいる。

最近になりモチベーションは少しずつ日本の学者の注目を集め始めているようであるが、今までそのコンセプトについて日本語で書かれたものは殆どなかった。それ故モチベーションの原則と範囲をここで全般的に説明したい。本論考の一部には、東京外国語大学大学院国際日本学研究院 NINJAL ユニット主催の講演会で、大西拓一郎先生との交流の中から生まれたものが含まれている。

本論文は二章に分かれており、純粋に理論的な章が先行し、応用的な章が後に続く。専門用語はフランス語で記され、例も主にフランスの方言から取り上げられるが、大陸規模の研究も含め、国際的な欧州プロジェクトにも論文の後半で触れられている。

2. 理論の基盤

2.1. ソシュールと言語記号の恣意性

よく知られているように、近代言語学の祖と見なされるソシュールの理論では言語記号はシニフィアン(表現、ソシュール曰く「音響のイメージ」とシニフィエ(意味、概念)という二つの抽象的な要素を併せ持ち成り立つ¹。しかし、元々、シニフィアンとシニフィエの結合には必然性がない。日本語では「月」という概念(シニフィエ)はツキという表現に結び付いているが、別にソヌやチラやサシカでもよかった。和歌山県のマンマイ(サン)、群馬県のノンノ(サン・チャン)、山口県のアトー(サマ)などが証明するように²、「月」という概念に多様な表現を結び付けることが可能である。逆に、ツキ [tsuɕki] という音の連鎖は「月」の代わりにどの意味に結び付けてもよかった。実際にツキは既に他の意味(「付き」)を付与されている。故に、根本的にはある音とある意味の間には必然の繋がりがないとソシュールは主張する。これを言語記号の恣意性と呼ぶ。

ソシュールは敢えて擬音語にも言及する。どの言語でも、時間の経過とともに擬音語も音変化を経て変わっていくことは擬音語の恣意性の証拠であるという。その上、国を超えよく似ているオノマトペがあっても、言語により擬音語は異なる。例えば、折れる音は日本語ではポキッと言い、フランス語では *crac* [kʁak] と言う。心臓の鼓動のドクンドクンはフランス語に訳すと *boumboum* [bumbum] になる。擬音語の表現と内容の繋がりに必然性があれば世界中の言語は共通に同じ擬音語を用いるはずであるが、実は違う。よって言語の中で最も恣意的ではないと考えられる擬音語さえもやはり恣意的である。

以上のことから、形と内容の結びつきの結果であるどの単語でも全く偶然にできているという印象を受ける。しかし、言葉の恣意性が不可避であると考えつつも、ソシュールは

¹ Saussure (2005 [1916] : 100-103)。

² データは日本言語地図(国立国語研究所 1966~1974)、第252図から抜粋。

恣意性に度合いを認め、二つのクラスに分類する。絶対的恣意性と相対的恣意性である³。フランス語の *vingt* (「二十」) は前者に該当するのに対し、*dix-neuf* (「十九」) という言葉は、その言葉を構成する *dix* 「十」と *neuf* 「九」という単語を想起させるから、後者に該当する。言い換えると *dix-neuf* は完全に偶然にできた言葉に到底見えない。相対的恣意性は単語の構成に入った他の単語や形態素がどれくらい明らかであるか、そしてどれくらい解釈しやすいかにより、度合いが変わるのである。すなわち単語の恣意性の度合いは話者達のその単語の構成の意識による。ある程度、言語共同体に、ある単語の意味表現の結びつきの理由が見える限り、その単語は絶対的に恣意的ではないと言える⁴。

意味表現の結びつきの理由を有縁性・モチベーションと呼ぶ。恣意性の反対である。ソシュールが「相対的恣意性」という用語を使うのと同じように、「相対的有縁性」とも呼ぶことがある。

2.2. 有縁性と語彙の創造

ソシュールが恣意的な側面を強調したのに対し、1950年代以降の研究者達は有縁性の重要性に注目する傾向がある。この流派の代表的な学者達は語彙の創造の過程に特に関心を寄せる⁵。彼らの研究の重要な成果は次のとおりである。①人間は命名する際、どのような手段を使うにせよ、既存の言語材料を用いる。派生やら複合やら比喩やらオノマトペのパターンといった様々な方法は全てこの条件に従う。②必ず対象物の顕著な特徴に指示し名前を与える。その特徴はフランス方言学では *motif* (モチーフ、動機) と名付けられた。最初に表現された(新しく作られた)記号が共同体に採用され、使われるようになるためには、動機がその文化において明瞭で分かりやすくなければならない。③結果として新しく作られた単語の成立には間違いなく正しく理由があり、偶然ではないから、必ず有縁的である。その単語は対象物の特徴が言葉に訳されたものである。言葉にされた特徴は、その特徴を持っている物の名前になる。それは、世界観を整理しながら早く様々な物に名前を与える非常に効率的なシステムであることは明確である。

日本語とフランス語の例を挙げよう。図1は *Zosterops japonicus* という学名を持つ日本に生息する小鳥を示す。見ての通り、一番著しい特徴の一つとして、目の周りが真っ白であること。日本語の共同体はその鳥の特徴(動機、モチーフ)を掴み、動物自体をメジロ(目+白)と命名した。実に有縁的な単語である。

³ Saussure (2005 [1916]: 180-184)。

⁴ 逆に最初の例に戻ると、日本語話者達にとってはなぜ「月」をツキと言うかの理由が見えないので、「つき」という記号は絶対的恣意性の類型に入る。

⁵ Guiraud (1955, 1964, 1967)、Alinei (1980, 1984)、Dalbera (2006)。



図1. *Zosterops japonicus*

図2は *Erithacus rubecula*、ヨーロッパコマドリの写真である。見てわかるように、際立つ特徴は赤茶色の胸元なので、フランス語では *rouge-gorge* (直訳「赤い胸」)と命名された。ほとんどのフランスの方言も同じ動機を利用し *Erithacus rubecula* に名前をつけた。例えば、南仏におけるオック語の方言ではその鳥を *barbaros* (赤い髭)、*còl roge* (赤い首)、*còl ros* (赤茶の首)、*gavach roge* (赤い首)、*gòrja roja* (赤い首)、*pança roja* (赤い腹)、*papach ros* (赤茶の胸)、*pièch ros* (赤茶の胸)、*pitre jaune* (黄色い胸)、*pitre roge* (赤い胸)、*pitre ros* (赤い胸)、*rigau* < AURIGALBUS (黄金のウグイス⁶)、*roge* (赤)、*ros* (赤茶)、*rosseta* (赤茶 + 指小接尾辞) などと言う⁷。



図2. *Erithacus rubecula*

これで分かるのは単純な考えから鳥の名前が決まったということである。しかも、いくら多数の語形が異なっても動機は少しも変わっていない。むしろ、その動機こそがいくつかのタイプを発生させた(例えば *barbaros* と *pitre jaune* は違うタイプである)。さらに各タイプの中でも、もちろん音声変異がある(地点により *còl roge* は [k'òl r:'uʒe]、[kw'el r'uʒe]、[kw'òl r'udʒe] 等と言われる)。よって理論的な面においては識別すべき以下の点がある。

- ① 実際に世界に存在する鳥(対象物)。
- ② 意味(シニフィエ、コンセプト化された抽象的なヨーロッパコマドリ)。上記のオック語の言葉の全ては同じ意味を持っている。
- ③ 表現。これを二つのレベルに分けた(タイプと発音)。タイプの面だけでは既に違う名称が沢山ある。
- ④ 動機。上記の単語の全ては同じ動機を用いて作られた。

⁶ そのほかにも、常に赤色を指す語源が提案されている(特に Dalbera (2006 : 127-133)を参照)。

⁷ オック語のデータの多くは THESOC (Dalbera et al. 1992-)から取得された。

ここで、もう一つの概念を挿入しなければならない。上記のコマドリの内容のリストを観察すると、全部同一の動機と全部異なる表現の間に、もう一つコンセプトがある。どう発想し動機を言葉にしたかということである。Del Giudice (2017)はこの概念を *désignant* (デザイニャン) と名付け、ここで湾曲アングルブラケット (<>) の間に提示することを提案している。

⑤ デズイニャン。昔のオック語では *ros* と *rouge* は意味的な区別がなかったことを考慮すると、上記の例の中には七つのデザイニャンがある: <赤い髭>(1項目)、<赤い首>(4項目)、<赤い腹>(1項目)、<赤い胸>(4項目)、<黄色い胸>(1項目)、<赤>(2項目)、<赤+指小辞>(1項目、因みにオイル語の *rubiette* も同じカテゴリーに入る)。要するに *còl roge*、*còl ros*、*gavach roge*、*gòrja roja* は全部違う表現であっても、同じ発想(首が赤い)からできており、違う単語で同じこと(赤い首)を言っている。

さて、語彙の創造は全く偶然な過程ではないことが分かった。では、誕生の時にありとあらゆる単語が有縁的であるとしたら、なぜ「月」のように語彙に不透明な(つまり恣意的な)単語が溢れているのであろう。それはただ観点の問題にすぎない。確かに、静的である共時態の観点(一般の話者の観点)からでは、全体として、言語は恣意的なシステムになっている。例外なく元々有縁的である語彙の大部分が共時態で恣意的になっているというのは、有縁性が変化により破壊されるからにはほかならない。とりも直さずそれを理解するのに動的な過程を考察する通時的な観点も考慮する必要がある。

2.3. 言語変化と有縁性のサイクル

モチベーションという概念は単語が一番最初に作られた時だけに使うのではない。変化にも関わる。言語の変えられない本質は恣意性であるとは言え、合理性を常に求める人間にとっては記憶力だけに頼るその恣意性は負担になってしまい、なるべく言葉に有縁性を注入するように絶え間なく話者達が奮闘している。したがって、変化は次のように起きると考えることが主流になっている⁸。

基本的には三段階ある。①上記の通り(メジロのように)、単語が生まれる時は、必ず有縁的である。フランス語ではこれを *motivé* (動機づけ) の段階と言う。新しく作られた単語の表現を聞いただけで動機が明瞭で単語がどんな対象物を指すかがすぐ分かるので、共同体に所属する限り、初めてその単語を聞くどの人も理解できる。表現だけで意味が通じる以上、単語はその名目価値 (*valeur nominale*) で有効であるという。②単語が普通に使われるようになった時、本来のモチベーションを考えずに話者達はその単語を使うから、動機が少しずつ忘れ去られて行く。この段階を *conventionnel* (通用的) と呼ぶ。例えば、日本人は「木漏れ日」という名称を聞く度に、動機がまだ見えるとしても、もう表現の分析(「木を通して漏れる日」)をし、この単語が「樹木の枝葉の間からさし込む日光」⁹の意味を持つことを割り出すという過程を通らず理解できる以上、「木漏れ日」は通用的な段階に入っていると思っていいていであろう。この段階の単語は用法価値 (*valeur d'emploi*) で機能

⁸ Dalbera (2006 : 23-24, 34)。

⁹ デジタル大辞泉の語釈。

する。③動機を考えずに使われてきた単語は、時間が経てば経つほど、音韻変化や背景の埋没や対象物の変貌のせいで、もともとの有縁性・動機が分からなくなってしまう、その表現が完全に不透明となる。「月」と同じように「山」という言葉はすっかりその段階に入っている。ようやく *arbitraire* (恣意的な) 段階に達したと言う。話者の共同体にとっては形態と内容の繋がりが不可解である。

恣意的な言葉は後戻りができないのが当たり前であると考えられるが、面白いことに第三段階になっても、また新しいモチベーションを入れることが可能である。この現象は *remotivation* (再有縁) と言う。そこに民間語源(勝手な想像と解釈)の役割が大きくなる。大西(2022)が書いている通り、人間は常に「万物に意味を見いだし、その解釈を通して生きている」。意味のない形などに意味を見いだすことは、心理学ではパレイドリアと言う。例えば、図3に写っているのはただのピーマンの四半分にすぎないが、人間の脳はどうしてもそれを人の顔として解釈したい欲求に抗えない。パレイドリアを言語に生じる再有縁と関連づけられる。当て字とか与義性類音牽引¹⁰とかはパレイドリアにととても似ている。



図3. ピーマンの四半分

再有縁は変化を起こすこと(有縁化)が多い。ここでも日本語とフランス語の例をあげよう。大西(2022)が記すように、「富山県五箇山地方では『桑の実』の方言形が1970年代にはツバミであった。(略)なお、この地域のツバミの古形はツバメであったと推定される」。だとしたら、なぜツバメ(「桑の実」)が変化したのであろう。その方言では鳥のツバメはツバクラと言うから、同音衝突とは関係がない。実は形態の解釈が全くできないツバメより、ツバミは「ツバという何かの実＝ツバ実」として単語の一部が解釈しやすくなる。話者による透明性と合理性の追求がこの変化を推進したと考えられる(大西 2022)。

フランス語ではあるインゲンマメの一種を *mange-tout* と言う。この言葉は一般に動機づけであると見なされている。フランス語辞書はその透明である(=分かりやすい)動機を拠り所にし、*mange-tout* の語形と語源を解説する。*Mange-tout* は *manger* 「食べる」(動詞、現在形、三人称)と *tout* 「全部」(副詞)を合わせて作られた複合語であると記載されている。そのインゲン全部(鞘と豆)が食べられることが理由とされている。そのイメージが余りにも強く、辞書の語釈にも影響している。日本の仏和辞書もフランスの辞書の定義

¹⁰ 大西(2022)がこの観念を「意味が関与する類音牽引」と定義し提案した。

に準じ、「さやごと食べられる豆」¹¹と語釈する。しかし、この説にはいくつかの欠点がある。まず、フランス語の動詞＋副詞(か名詞)という組み合わせで作られた名詞では対象物が動作の主体である¹²。*Mange-tout* の場合では、対象物であるインゲンが食べるのではなく、逆に食べられる。驚くべき例外であるから、語源が疑われる。動機と思われるものも疑問である。どのインゲンでも鞘を食べるから、動機と思われるものは本当にそのインゲンの一種の特性を指すであろうか。辛うじて、薄いインゲンだから鞘の筋を取らないで食べられると説明できるが、ちょっと納得しづらい。一方、フランスの方言ではそのインゲンを *cornette* (〈小さい角(つの)〉)、*baneta* (〈小さい角〉)と呼ぶ。*Cornette* はもう一つの意味を持っている。それは修道院の人が使っていた角のようなかぶり物。そこから連想し、南フランスにおけるそのインゲンの名称は〈修道女〉(*monja*、*mongeta*)や〈修道士〉(*monget*、*monjon*、*mongetet*、*mongil*、*mongetau*、*mongeton*)である。今のオック語話者にとって、その名称が実際に恣意的になってしまったにも関わらず、図4は角帽子とそのインゲンとの連想の自然性を示す。ということで、標準語系の名称は別にして、そのインゲンの他の名称の動機は角と関連する。故に動機が〈全部食べられる〉という通説を受け入れると、この動機はやはりまた例外である。



図4. 「*mange-tout*」インゲンと修道女の帽子

上記のことから、*mange-tout* の語源の再検討が必要であるとする学者がいる。Dalbera (2006 : 45) は *mange-tout* が南フランスのオック語の *mongeton* [mũndʒet'u] に由来するという仮説を唱える。借用語として、*mongeton* がフランス語に入った時、フランス語話者にとって、既に完璧に恣意的であったが、人々が類音牽引に誘導され、再有縁し、「唯一全部食べられるインゲン」の神話に頼り、*mongeton* が *mange-tout* になった¹³。要するに、既に元々の動機を持っていた単語は恣意的になってから、有縁化を経て、新しいモチベーションをもらった。

しかしながら、そうして再有縁された単語も通用的 (*conventionnel*、上記参照) の段階を通り、いずれまた恣意的になり、そしてまた再有縁される可能性がある。したがって、単語の命は循環している。敢えて借用語を取り入れない言語を想定しても、既存の要素

¹¹ ロワイヤル仏和中辞典。

¹² 例えば *risque-tout*、*fait-tout*、*vaurien*、*tire-bouchon*、*taille-crayon*、*cache-misère*、等等。

¹³ この例は「与義性類音牽引」に完璧に該当する。

がずっとリサイクルされ、絶えず語彙の変化が進む。ヨーロッパでは、有縁→恣意→有縁→恣意→有縁の繰り返しを「cycle motivationnel」(有縁のサイクル)と呼ぶ。対象物の変化や埋没、音韻変化、社会変化などにより有縁性が常に破壊されていると同時に、常に有縁化が起こっている。それは全体的に、(根本的に恣意的である)言語の合理性をある程度保つための現象ではないかと考えてもいいだろう。

しかしながら、民間語源が必ずしも変化を起こすわけではない。ただ結果のない無邪気な解釈の段階にすぎない場合もあるはずだ。フランス語では通行料は *péage* と言う。ある話者は *péage* が *payer* (「払う」)の派生語であると思っている。しかし語源はラテン語の PEDEM (「足」)の派生語である。PEDEM が語源なのは、もともと *péage* はある領地に足を踏み入れる権利のことから来ている。綴りは<péage>だが、この言葉の発音はもうフランス語の *pied*(「足」)に余り類似していないから、間違えて<payage>と書く人もいる。民間語源が生じて *péage* の形態(発音)は安定しているらしい。

2.4. 有縁性なのか相対的有縁性なのか

以上のことで分かったように、有縁性を強調する50・60年代以降の研究者の影響で、ソシュールと違い、「相対的恣意性・相対的有縁性」の代わりに直ちに「有縁性」を唱えるのが普通になっている。どんな単語も、原初、形と内容の結びつきに理由があったから、その結びつきは偶然ではない、故に有縁的であるということが論拠である。

しかし絶対的な意味では、特定の意味と特定の音の結びつきに理由があっても、普遍的な必然性はない。上で述べたように、一番有縁であると考えられる擬音語も、言語により違うということが証拠である。ということで、どの単語にも例外なく恣意性がある。恣意性の反対である有縁性は恣意性を完全に打ち消せないということである。

そして恣意化してしまった言語の中には、表現と内容を併せ持つ恣意的である単語(や他の要素)があるが、よく使われる記号なので、その単語にある形と意味の不可解な繋がりに話者は慣れている。またその恣意的な物は話者共同体により組み合わせされたり、関連づけられたりし、単語の創造や与義性類音牽引などが起こる。少し前の例に戻ってみよう。ツバミの「ミ」とメジロは有縁的であると書いた。そこでさらに掘り下げて考えると、昔の日本語話者は恣意的である「目」と恣意的である「白」を組み合わせ、メジロという名詞を作った。[m] [e] [d̥z] [i] [r] [o] という音の連鎖とその鳥の間には必然的な関係はない。本質だけを見ると恣意的である。しかし日本語という体系の中では、既に意味を持っていた恣意的であるメとシロを結合することは話者にとっては意味があった。

類音牽引についても同じことが言える。「桑の実」を意味するツバミの[mi]という音と「果実」という意味の間に、本来ならば必然的な関係はないが「ツバメ」が「ツバミ」に変化すると、内容の面で繋がっている「桑の実」と「果実」は、表現の面でも繋がるようになる。根本的な言語の恣意性から逃げられなくても、また話者にとってはその変化に意味がある。

つまり、どう考えても有縁性・有縁化は相対的な観念である。恣意的である既存の言語体系に依存しているが、話者共同体は解釈し、恣意的な単語・要素を結びつけたりするというプロセスで、その恣意的な体系を整理し、構造的・合理性を高めようとしている。有

縁性は恣意的な環境の中に浸る認識の網・ネットワークであると言える。大西(2022)は「知の範囲内における表現と内容の繋がり合理性・合理化」と有縁性・有縁化を定義する。音の列とそれが指定する対象との間には、自然なつながりがないのだから、ソシユールの言うとおりである。モチベーションは相対的なものに他ならない。このことは、有縁性という言葉をやや乱暴に使うとき、念頭に置くべきであろう。

2.5. 有縁的でない変化と語彙以外のモチベーション

ここまでは有縁性による変化(すなわち有縁化)にしか触れていない。しかし、言うまでもなく、体系の合理性を高めるような話者の解釈が変化に参加しない事象ももちろんある。例えばニース弁(オック語の方言)ではイタリア語から借用された *invece* [inv'etʃe] (「～の代わりに」)という表現は本来の意味を保ちながら、時々 *en vuèch* [ɛ̃ɲv'œtʃ(e)] (前置詞 + *vuèch* 「8」)になってしまう。これは意味の面では全然合理性を高めない。ただ *vece* と *vuèch* が似通い過ぎ、混同しやすいから、話者達の馴染んだ語への変化が起きてしまう。このような現象は大西(2022)により非義性類音牽引と日本語で名付けられた。

語彙以外の変化に着目すると、当然動機と関係ないものは数多くある。プロヴァンス地方ではストレスアクセントを負わない [ai] と昔発音されていた二重母音は[eɪ]に変わってしまった。意味が関わらない純粋な音変化であった。一方、ニース弁では、文章の中での代名詞の位置が変わってきた。19世紀に盛んであったイタリア語式の順番が、20世紀になり普段の話言葉ではどんどんフランス語式の順番に置き換えられつつある。例えば、現在では *vòli mi maridar*「結婚したい」という傾向があるが伝統的な語順では *mi vòli maridar* であった。このような事例は、有縁化の話にならないが、こういった無縁化の事例が文法的な変化の大部分を占めている。それでも、下記に示すように、文法(特に形態素)まで影響を及ぼすモチベーションも認められる。

南フランスの方言では、ラテン語の語末音消失のせいで、MITTO「私は置く」、MITTIS「貴方は置く」、MITTI(T)「彼/彼女は置く」が一旦 *met*、*mets*、*met* になってしまった。一人称と三人称の区別が無理になっていたのも、全ての方言が一人称の新しい語尾を導入した。オック語では、大抵の場合、補足となる母音は/e/なので、至る所で「私は置く」の形態は *mete* になることが当たり前であると考えられるのに、多くの地方では *meti* か *meto* [m'etu] が実際に使われている。それは多分語幹・語尾の分析できない *ai* [ai] < lat. HABEO (私は持っている) や *fau* [fau] < lat. FACIO (私はする) の影響の結果だと考えてもいいであろう。ある地方では話者達は *ai* の最後の母音が「一人称」の意味をもつと解釈し、実際に/i/にその意味を付与し、ほとんどの動詞につけて、今でも *meti* と言いつけている。一方、他の地方では *fau* の最後の母音が「一人称」の意味をもつと解釈し、*meto* [m'etu] と言う。*Fau* の [u] はやはり FACIO の語尾の-oの体系外になってしまった名残である。/i/は HABEO の-e-の結果で、すなわち何の意味もない、ある動詞の語幹の一部のみであったのに、意味の解釈と関係ある理由で動詞の一人称を表す語尾になったから、その変化は動機づけであったと言える。偶然ではなかった。モチベーションそのものである。

同じく、フランス語と同様に、オック語では木に名前を付けるのにその果実の名称

に*-ièr* という接尾辞を付ける。例えば、*poma* 「りんご」、*figa* 「イチジク」、*pera* 「洋梨」の木は *pomièr*、*figuèr*、*perièr* と言う。それで、たくさんの地方では、*ciprès* 「糸杉」< CYPRESSUS は、**cipra* という実をつけないが、木である故に、*-ièr* という形態素と関連され、*ciprièr* に変化した。

3. モチベーションの応用

第2節では、言葉の創造と変化の仕組みに光を当ててきた。これで、モチベーションの考察は、語彙の力学の中で働く現象の理解を深めることができる。さらに、モチベーションの理論をデータの整理と分析・辞書とアトラスの作成などに応用することができる。そしてその成果はさらなる発見を促す。

3.1. 豊かな方言データの整理

第2.2節ではヨーロッパコマドリのオック語におけるいくつかの名称を通じて、デズイニャンという概念が導入された。それを活かし、次のようにモチベーションを使用し、いくつかのレベルで語彙の整理ができる。

| 意味:コマドリ ¹⁴ | | | |
|-----------------------|---------------------|----------------------|----------------------|
| 動機(レベル4) | デズイニャン(レベル3) | タイプ(レベル2) | 発音(レベル1) |
| 赤茶色の胸 | 〈赤い髭〉 | <i>barbaros</i> | <i>barβar:'us</i> |
| | | | <i>barβor:'us</i> |
| | 〈赤い首〉 | <i>còl roge</i> | <i>k'ol r:'uʒe</i> |
| | | | <i>kw'el r'uʒe</i> |
| | | | <i>kw'ɔl r'udʒe</i> |
| | | <i>còl ros</i> | <i>kɔr:'us</i> |
| | | | <i>kwar:'us</i> |
| | | <i>gavach roge</i> | <i>gavar'udʒe</i> |
| | | | <i>gabar'udʒe</i> |
| | | <i>gòrja roja</i> | <i>g'ɔrʒa R'udʒɔ</i> |
| | <i>g'ɔRʒɔ R'uzɔ</i> | | |
| | 〈赤い胸〉 | <i>papach ros</i> | <i>papar'us</i> |
| | | | <i>pafar'us</i> |
| | | <i>pièch ros</i> | <i>pj'ɛtʃerus</i> |
| | | | <i>p'itʃur'uf</i> |
| <i>pitre roge</i> | | <i>p'itre r'udʒe</i> | |
| | | <i>pitrer'uje</i> | |

¹⁴ 表示の都合上、データ(特に発音のデータ)の一部のみを表示している。

| | | | |
|-----------------|-------------|----------------------------|----------------|
| | | <i>pitre ros</i> | pitrer'us |
| | | | pitrœr'us |
| | 〈赤い腹〉 | <i>pança roja</i> | p'ãsa R'uʒɔ |
| | | | pãʂɔR'ɔʒɔ |
| | 〈黄色い胸〉 | <i>pitre jaune</i> | p'itre dz'awne |
| | 〈黄金のウグイス〉 | <i>rigau</i> | rig'aw |
| | | | rejg'aw |
| | 〈赤〉 | <i>roge</i> | R'udʒe |
| | | | RW'ijf |
| | | <i>ros</i> | r'ys |
| | | | |
| | 〈茶(+指小接尾辞)〉 | <i>rosseta</i> | RUS'etɔ |
| ruʃ'etɔ | | | |
| <i>rubiette</i> | | Rybj'et | |
| ずんぐりした体型 | 〈小さい牛〉 | <i>bovet</i> ¹⁵ | buv'et |
| | | | buβ'et |
| | | | buβ'e |

この上の表は、データが豊富で俚言の多様性を数レベルに分類し分析ができるような整理法を提案している。抽出された 33 発音のサンプルには、17 タイプ、9 デズィニャン、そして 2 つの動機だけが該当する。

実際、ある地方における同系のたくさんの方言は、一つの意味に対して、表現の氾濫と(これらの表現の起源にある)動機の貧困というパラドックスな状況を生み出しがちである。言語地図は、この状態をよく示している。例えば、偶然手にした西ラングドック地方の言語地図である ALLOc (Ravier 1978-1994) は、「(日が)沈む¹⁶」の項目のページでは、約 40 種類の形を提供している。その中から [ʃe reh'k'un]、[ʃe k'usɔ]、[se βai ts'ajre]、[se k'ulkɔ]、[s am'ago]、[ʃe k'ɔjtsɔ]、[se ts'aj]、[s ɛm ba l l'ets]、[s am'aɔ]、[bɔ ɔl lj'ets] という発音が例として取り上げられる。図5は地図の一部を示している。

¹⁵ この名称は、鷲(ウツ)と共通である。

¹⁶ フランス語のオリジナルタイトルは「(le soleil) se couche」である。

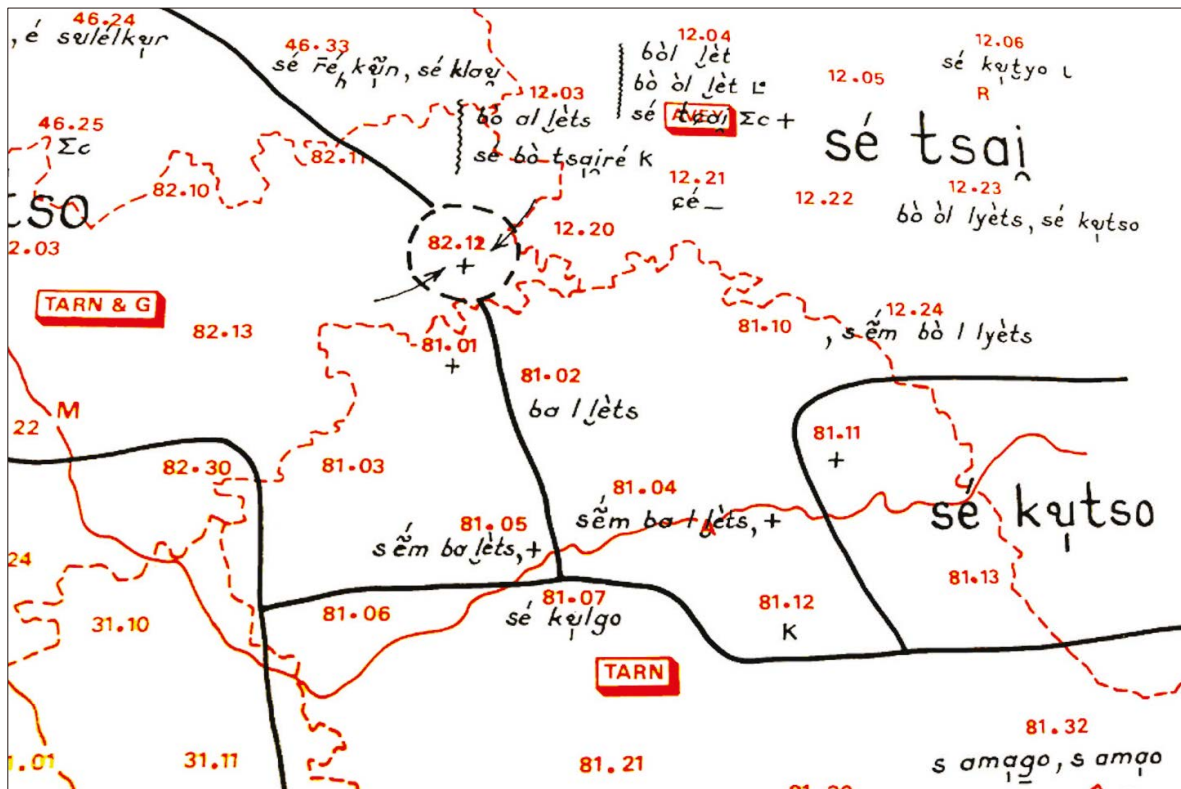


図5. ALLOc の「(日が)沈む」(一部)

それらの発音は、タイプにすると、*se corca*、*se coja*、*se jai·se va jaire*、*(se'n) va al lièch*、*s'amaga*、*se rescond* という六つの主なタイプに整理される。この最後の二つのタイプは「隠れる」という意味の同義語で、その他はすべて「横になる、寝る」という意味の同義語である。この ALLOc の地図は、一見ばらばらの空間を示しているが、実はすべての形態が極めて均質なモチベーションに基づく。10ほどの県にわたるすべての日没の呼称を生成したのは、たった二つの動機である。これらは「太陽が見えなくなるから隠れる」と「地面について、(光るという)活動を止めるから眠る」というのである。

つまり、総合的な方言辞典は、最も非構造的なものから最も構造的なものまで、四つのレベルを提供することが理想である。最も散らかっているものである発音(レベル1)は、そのタイプ(レベル2)に対応するレンマ¹⁷の下にグループ化されることになる。レンマそのものは、デズィニヤン(レベル3)ごとに、そしてそれを生成した動機(レベル4)により整理される。辞書の項目が標準語で書かれた意味であり、語形の索引さえあれば、意味からまたは語形から検索ができ、簡単にその辞書を使いこなせる。方言空間の発音の無秩序と、強力にその方言空間を構成する世界観によるモチベーションの情報とを、同じ道具の中で調和させることは独創的で研究に有用な試みであろう。短い解説と単純化された概要の(語形とモチベーションの)地図も付ければ、充実した情報を読者は得られる(Del Giudice 2017: 571-588)。以下の第3.3節では再び辞書に触れていく。

¹⁷ レンマは辞書の見出し語に使われる語彙単位の特定の形である。また、語彙単位の全ての形をカバーする。

3.2. 語源の研究

3.2.1. 語源の問題に手がかりを与える方言学

これまでは、形から離れ、話者共同体による発想や解釈を重視することで分類を簡略化することができるのを見てきた。以下、2.3.節で既に(*mange-tout* を例に)触れていることについて、より詳しく解説していく。方言空間は均質な文化単位を構成していることを前提とする。

語源研究は、多くの場合、できるだけ昔に遡り、ある言葉の古い形(いわば本来の形)を発見することを目的としている。このことから、語源形(昔の文章にある、あるいは学者によって復元された単語)を提供した時点で、この研究は目的を達成したことになる。

語源学は、単語の発音が時間とともに変わっていくという事実を中心に据えている。この観点からすると、単語の本質を知ることは、その単語のシニフィアンの変容の過程を特定することである。このように、単独で捉えた単語の音素の外観の変化にこそ、注意が向けられるのである。ロマンス語の諸言語は、多くの言葉がラテン語からどのような経路をたどってきたのか、文献の多さと学者の大いなる努力により、確かな情報が得られるようになり、素晴らしい発見があった。時代を超え、追跡のできる単語が何世紀にもわたって様々に出現する様子を追うことで、音韻変化の法則を明らかにすることもできたのである。

当然、まだ不明な語源や曖昧な語源も残っている。その際は、ロマンス語語源学はラテン語の語彙の中から、研究対象の単語の発音に類似している語を発見することを目的とする。それができなければ、他の古代言語にも目を向け、似たような言葉を探していくことになる。語源を推定した後は、可能であれば、音韻進化の法則を考慮し、昔の語形と現在の語形との不一致の説明に奮闘する。最後に、古形と現代形の間には存在する(あるいはしない)意味的なつながりを、できる限り、説明することになる。残念ながら、このやり方では提案されている語源が正しいかどうかは確かめることは難しい。怪しい語源を正しいものとして認めてしまう危険が常にある。さらに、語源学者はどうしても全ての語彙の語源を提示しようとするゆえ、昔の文章に記録されていない語形を語源として認めることは珍しくない。その語形は音変化の法則に基づいて復元されたただの憶測である。形が実際昔使われた語に合っているとしても、本来の意味は分からない。復元された語源に現代の単語の意味を付与するしかない。完全な推測で語源は基層・傍層や昔のオノマトペに該当するだろうとされる場合もある。

そのような状況下で、語源は言語の本質と仕組みについて何を語っているのであろうか。現代的な意味が勝手に付与された語源を復元することが、どのように知識に役立つのであろうか。どうやってその言葉ができたのかは不明のままである。フランス語の *case* 「小屋」が「ラテン語の *CASA* を借用したもので、起源は不明であるが俗語的な言葉」であり、「母音の間の *s* は借用、あるいはインド・ヨーロッパ以前の簡素な住居を表す言葉を示唆している」(Rey 1998)と指摘することは、どのように言語の理解に役立つのであろうか。*CASA* の例は、フランス語からラテン語へ、時間軸を1度戻しただけでは、この名称の成り立ちと発展について何の説明にもなっていないことを示している。では、これまでの語源研究の欠落を補うことができるのであろうか。

ロマンス語の研究においては、語源学が言語記号の二つの側面のうちの、一つの重要性をしばしば過小評価してきたかもしれない。シニフィエ(と命名のプロセス)を犠牲にし、シニフィアンに集中してきた。しかし完成された語源学は両面を扱うべきであると考えられる。すると語源の意味の研究を可能にする手段・手続きが必要になる。モチベーションの観点から、不透明で、発音が復元された語源だけを提供することが、もはや目的ではない。創造の源である根本的な動機を、意味ごとに特定することが重要なのである。

そこで、動機の検討がとても役に立つ。同系統の言語群・方言群では、形が非常に多様であるにもかかわらず、各概念の動機が均質であることを見てきた。これらの意味パターンは、研究者に手がかりを与えることで、新たな語源研究の枠組みを提供する。

この方法は、同じようなものを対象とする単語をできるだけ多く集め、透明な動機を持つものを使用するというものである。この課題に、方言学は非常に役に立つ。通常の語源研究が、基本的に一つだけの単語に集中しシニフィアンに基づき(意味的な検証を行うことができないままで)研究するのに対し、動機(モチベーション)に基づく方法は、まず同じ概念を指す俚言を最大数集め、タイプを解明する。

それは方言の変異を考察し、タイプの中では相対的に安定・明瞭で自然に感じる動機を持つ語形(多くの場合、語源が既に確実に分かっている単語である)と部分的に再有縁されたものや偶発的な事例(類音牽引など)により変化したものと見分け、そのタイプの基準形を定める¹⁸。この作業は、単語のいくつかのタイプを明らかにし、基本的な動機とデズィニャンがどのように沢山の変種を生んできたかを示すものである。次に、タイプと変種を生成した動機を分類する。そうすると、これまで不透明であった他の単語の研究が容易になる。

研究者は、一見不明瞭に見えるタイプが、基本的な動機・デズィニャンの類型を提供してきた他のタイプと同じような本来のパターン¹⁹から作られたのではないかと自問することになる。そして、絶望的なケースをそのパターンと照合する²⁰。この方法では、必要な音声

¹⁸ 偶発的な語形がどんなパターンに従い変わったかということも考慮し、モチベーションに関する変化を書き留め、分類することが役に立つ。例えばオイル語(北フランス)の方言ではコマドリを *Pierrot* (*Pierre* という名前の愛称)と言う地点がある。語源辞書ではその名前が語源と書いてあるが、モチベーションの方法を使用し、他のデータ(第2.2節と第3.1節のデータとか)と照合すれば、実は語源がまた *pit* < PECTUS 「胸」+ *roux* < RUSSUS 「赤茶色」であることが解明する。更に、類音牽引によって、恣意化してしまった *pit-roux* が *Pierrot* になったことは意外ではない。なぜなら、動物の種類を人間の名前で呼ぶというパターンはフランスでは既に知られている(*renard* 「狐」、*jacquot* 「オウム」、*margot* 「カササギ」、*catarineta* 「てんとう虫」、*guillaume* か *bernard* 「カマキリ」などの名称は元々人の名前である)。*Pierrot* はそのパターンの規則に沿ったもう一つの例になる一方、そのパターンの妥当性を一層強める。

一方、データを集めたり、分析したりするという過程を通し、比較のお陰で少しずつタイプと語源を直したり、もっと正確にしたりすることもできる。

¹⁹ フランス語では *matrice lexicale* (「語彙の雛形・母胎」)と言う。

²⁰ このように上にある脚注 18 の *Pierrot* 「コマドリ」の語源が確定された。同じように、語源辞書により語源不明とみなされる Ille-et-Vilaine 地域の *roupie* 「コマドリ」は、実はとても分かりやすい語源を持っていることが明瞭になる。他のデータのように *roupie* は「胸」と「赤」を意味する二つの言葉の複合語ではないかと推測すると、やはり *roux* < RUSSUS 「赤茶色」+ *pit* < PECTUS 「胸」の結果 (*roux-pit* > *roupie*) であることが明らかになる。

確認²¹は並行して行われる。同じ動機・創造のパターンが何度も繰り返し出てくれば、間違える可能性は低くなる。このように、音声だけでなく、記号の二つの側面(表現と意味/動機)を考慮することで、単一の分析ではできなかった二重の検証が可能になる。このことから、多数の単語にわたり何度も何度も出てくる動機・デズィニャンを観察することが可能になる方言の研究は、起源が不明瞭(または疑わしい)単語の語源研究を方向づける(Dalbera 2012: 36-41)。方言学が明らかにする繰り返される動機・デズィニャンのパターンは、語源学者が問題のある単語の起源を見つけるための道を開くものである。

3.2.2. 例

Case の事例をもう一度検討しよう。第3.2.1節ではなぜフランス語 *case*・ラテン語 *CASA* を *case*、*CASA* と呼ぶようになったのか、今のところ語源研究は説得力のある説明をまだ提供していない。10年程前 Dalbera 先生のもとでモチベーションを用い、ニース大学のセミナーに参加する大学院生は数時間だけで次のように説明の提案に至った。ここでは紙面の都合上、標準フランス語の23語のみを収録した要約を掲載する。ロマンス諸語では *casa* は「小屋」や「家」という意味を持つから、同じ意味・近い意味を持つものをまず集める。例えば、*abri*、*asile*、*bâtiment*、*construction*、*demeure*、*édifice*、*étape*、*ferme*、*foyer*、*gîte*、*halte*、*hôpital*、*hospice*、*hôtel*、*jas*、*maison*、*manoir*、*mas*、*masure*、*point de chute*、*refuge*、*résidence*、*toit* など。同語源の単語を一つにまとめたリストはこうなる：*abri*、*asile*、*bâtiment*、*construction*、*édifice*、*étape*、*ferme*、*foyer*、*gîte*、*halte*、*hôtel*、*maison*、*point de chute*、*refuge*、*résidence*、*toit*。確定であるこの言葉の語源を調べると、動機を5類型に分類できる。

動機1「居る、とどまる、定着するという考えからできた語」。これに *maison* 「家」< ラテン語 *MANERE* 「とどまる」の派生語、*ferme* 「農家」< ラテン語 *FIRMARE* 「定着する」、そしてホテルの名前によく使われる *halte* 「宿泊所」< ドイツ語 *Halt* 「停止」、*étape* 「宿泊所」< 旧オランダ語 *stapel* 「一時停止」が該当する。

動機2「安全なところ、避難ができるところ、防御が備わっているところであるという考えからできた語」。*Hôtel* 「ホテル」< ラテン語 *HOSPES* 「旅行者に避難場所や保護を与える人²²」、*toit* 「家、宿泊所」(< *toit* 「屋根(=太陽と雨からの避難所)」の意味のズレから)、*abri* 「宿泊所、小屋」< 古いフランス語 *abrier* 「守る、かぶせる、保護する、葺く」の派生語、*asile* 「宿泊所」< ラテン語 *ASYLUM* 「追いかけられた人が避難する、侵すことのできない場所」、*refuge* 「山小屋」< ラテン語 *REFUGERE* 「逃げる」の派生語はこの動機にあたる。

動機3「人間が建てたものであるという考えからできた語」。このカテゴリーには *construire* 「建造する」、*bâtir* 「建造する」、*édifier* 「建造する」から派生した *construction* 「建造物、建物」、*bâtiment* 「建造物、建物」、*édifice* 「建造物、建物」が

²¹ 音変化の法則を参照し、発音の面でも方言の単語は提案されている語源の変化の結果としてあり得るという確認。

²² *HOSPITALITAS* の意味から。

所属する。

動機4「炉がある所という考えからできた語」。上のリストでは *foyer* 「家庭、家」(<*foyer* 「炉、炉の火」の意味のズレから)しかこのカテゴリーに入らないが、ラテン語では *AEDES* は「いろり、火を起こすところ」から「家」へ、そしてオック語でも *fogau* 「家、家庭」(元々「炉」)、標準フランス語以外、同じ意味の変化を経た他の事例がある。

動機5「落ちる、降りる、(体を)下ろす、落とす、という考えからできた語」。フランス語では泊まる場所は *point de chute* (直訳「落下点」という。「(宿などに)泊まる」ことは *descendre* 「降りる」という。同じように *résidence* 「住まい」は動機1にも該当するラテン語の動詞 *RESIDERE* 「いる、残る、滞在する」に由来するが、この語源の主な意味は「座っている」であり²³、すなわち腰を下ろすことの結果を指す名詞。*RESIDERE* は、*RESIDERE* 「腰を下ろす、落ち込む、崩れ落ちる」との密接な関係で考えなければならない。*Gîte* 「宿、住まい」も *gésir* 「横たわっている、落ちている」の派生語で、語源は(他動詞の *JACERE* 「投げる、突き落とす、播く」の結果を指す)自動詞の *JACERE* 「横になっている、倒れている」である。ということで、家や宿の概念、そして泊まること、降る・落ちるそして自分の身体を下ろす・落とすことに結びついている。

これらの事例をもとに *case*、*CASA* の問題に戻って、この五つのカテゴリーのうちどれかに意味が一致するラテンの単語を探すと、動機5にあたる *CADERE* 「落ちる」を見つける。それに該当するスピーヌム(目的分詞)は *CASUS* (男性系)、*CASA* (女性形)である。女性形は *case*、*CASA* の説明になるだけでなく、男性形は *chez* 「(誰か)の家」の説明にもなる。*Chez* は長い間問題になっていたのは最後の *-e* がなかったことであつた。*CASUS* という *chez* の語源は、何を指すのかわからないまま、純粹に音韻だけで復元されたことはあつた。でも *chez* が *CADERE* のスピーヌム(つまり既知でラテン語の文章に存在する形)からできたというのは誰も思い付かなかったので、語源として音韻的にふさわしい形である *CASUS* はなかなか受け入れられなかった。そのため、*chez* は *CASA* と「家」を意味する他の男性名詞(*MANSUS*、*DOMUS*)との混淆の結果である、または接語性により語末の母音の脱落の結果であるなどと想定された²⁴。

CADERE という語源が正しいかどうかは、セミナーが終わってから誰もその研究を続行していないだけに、実は確かではない。でも、この例が明らかにするのは、動機を中心にするれば、視点を変え意味的な根拠に基づき、決まった手続き・枠組みに沿い、学生にも新しい仮説を立てることができる。徹底的な研究により、その仮説をまた検証したり、無効にしたりする必要があるが、確実に、モチベーションは今まで考えなかった道を開いた。

3.3. 辞書とアトラス

3.3.1. 辞書

モチベーションは今のところ、辞書にはあまり適用されていない。このような状況の中で、ただ一つ残念なことがあるとすれば、辞書が動機を明示せずに語源を挙げるのがあ

²³ *RESIDERE* は *SEDERE* 「座っている、定着する、滞在する」から派生した。

²⁴ Wartburg (1922- : 2, 452b)。

ることである。最も明白なケース(例えばラテン語の RUBEUS 「赤」に由来する *rubiette*²⁵、または複合である *rouge-gorge*)では、読者にとっては動機を割り出すことが容易にできるが、*merle*「黒歌鳥」のような言葉はどうか。多くの辞書では、*merle* はラテン語の MERULUS に由来するとされているが、どちらの形も同じ意味(「黒歌鳥」)であるため、情報はここで止まっている。モチベーションの研究によると、MERULUS の起源は斑紋のある羽を持つ他のツグミ科の鳥に比べ、この鳥が平毛であることにある(Dalbera 2006 : 137-152)。このことから、MERULUS は MERUS 「純粋な、混ざり物のない」の派生語であることがわかる。したがって、辞書は「*merle*、ラテン語の MERULUS 『黒歌鳥』は、MERUS 「純粋な、混じりけのない」に由来し、単色の羽にちなんで〈無地の(鳥)〉である」と解説しないと、語源の情報が不十分である。

別の例を挙げると、(*se*) *plaindre* 「嘆く」の語源や動機はよく知られている。しかし、有名なフランス語辞書である *Petit Robert* には、「*plaindre*、ラテン語の PLANGERE から」以上の語源情報はない。この項目を参照する読者は動機に到達するチャンスがない。実際、*plaindre* と同じく PLANGERE はラテン語で「嘆く」という意味であるから、これ以上情報を増やす必要はないと著者は論理的に考えたのである。しかし、この意味は、もう一つのラテン語の「打つ、自分を打つ」という意味から来る。よって説明文は次のように表現するのが良いであろう：「*plaindre*、ラテン語の PLANGERE 『嘆く』、本来の意味『打つ、自分を打つ』から、古代ローマの習慣に由来して〈(苦しみの表れとして)自分を打つ〉ことである」。動機との関係を説明することで、辞書の語源の記述がより完全なものとなる。

更に Del Giudice (2017 : 136-138) は各単語について、同じ動機に支配される異なる用法を纏め、用法の動機の説明を短い表示で辞書に提示することを提案した。例えばフランス語の *rossignol* 「小夜なき鳥」の語源の動機は確実にされていないが、夜に鳴くことと関係があると想定されている(Saarinen 2002 : 86)。*Rossignol* には他に歌う別の種類の鳥、歌手、売れない本、空き巣狙いが使う(鍵のかかった)ドアをこじ開ける鍵などといういくつかの意味がある。項目では動機ごとに次のようにその意味を提示することができる(ここでは、ごく簡略化したものを提案する)。

Rossignol

動機 a : 〈夜に歌う鳥であるから〉

意味1 : サヨナキドリ(学名 : *Luscinia megarhynchos*)

動機 b : 〈(サヨナキドリのように)歌うから〉

意味2 : クロジョウビタキ(学名 : *Phoenicurus ochruros*)

意味3 : 歌手

意味4 : 泥棒のこじ開ける鍵 (フランス語ではよく回る鍵のことを「歌う」ということから)

動機 c : 〈(サヨナキドリが枝に止まるように)高い棚にずっと止まったままであることから〉

意味5 : 売れない本

²⁵ 方言により、胸や尻尾が赤い鳥を指す。

3.3.2. アトラス(言語地図)

上記の辞書の提案は一つのアイデアにすぎないが、モチベーションを導入し、プロジェクトの中心にした大きなアトラスは既に二つある。一番最初に作成が始められたのは ALE (Alinei *et al.* 1983-) である。このアトラスは Mario Alinei の指揮のもとで作成された全ヨーロッパの地図集であり(図6)、いくつかの語派に渡り、モチベーションの研究を通じてヨーロッパの文化・文明の歴史を遡ることが目的である。各項目は地図と徹底的な解説が備わっている。

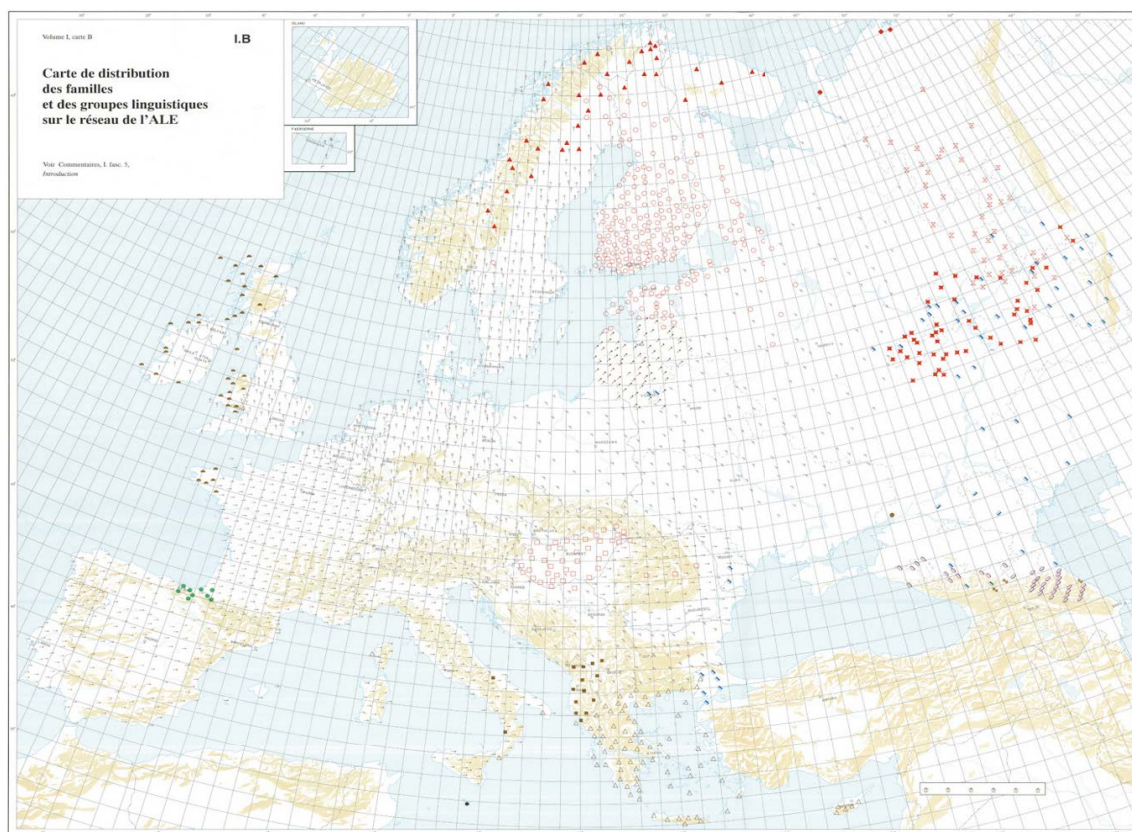


図6. ALE の範囲

ALE は言語の多様性にもかかわらず、ヨーロッパ文化の歴史の統一性を示している。この言語地図は特に、語彙が、宗教的発展の段階に関連した三つの歴史的な層に従い構造化されていることを示すことに寄与した。この三つの層(新しいものから順に、キリスト教あるいはイスラム教の層、擬人観の層²⁶、石器時代に遡る動物形態観の層²⁷)は、方言の語彙に現れている。さらに昔の忌み言葉、タブーに詳しく触れており、そういった現象と命名の関係について理解を深めることができる²⁸。またこのアトラスは意味ごとに動機を

²⁶ フランス語では *strate anthropomorphique* (英語: *anthropomorphic layer*)。

²⁷ フランス語では *strate zoomorphique* (英語: *zoomorphic layer*)。

²⁸ 大西(2022)は日本語のデータを分析し、同じようなテーマに触れている。ある言葉を言わないようにすることを「能動的回避」と呼び、それも変化を起こす可能性がある。

類型化することにも大きく貢献している。ALE はモチベーション解釈アトラスの世代を開いた (Viereck 2005)。

ALiR は ALE と軌を一にするプロジェクトでありながら、ヨーロッパのロマンス諸語の方言に特化した言語地図である。その範囲の中で地点の数は ALE の倍に達し、原典もより豊富である。ALiR の研究と解説は語源に重点を置く。例えばこのアトラスは、研究においてしばしば批判された、非常に古いオノマトペや音象徴の語根を再評価することを可能にした (Contini / Carpitelli 2022)。

図7は ALiR の地図の例である。項目は「コウモリ」²⁹で、動機により方言の名称が概ね 4 分類された。青色はコウモリを鼠の一種として記述する命名 (大概、ネズミ+形容・接辞)、赤色はコウモリの外見や行動からできた命名、緑色は民間信仰に基づく命名、そしてオレンジは泣き声に基づく命名である。一見するとバラバラな単語が集められたロマンス諸語は、動機による分類を行うことで、きれいに東西に分かれるのである。さらに各色の中でも、記号でデズィニヤンにより下位類型されている。この下位類型は意味のみに基づいているので、例えば [d'ɔbubiñ'udu]³⁰ のようなコルシカ型の語と [r:'atɔpen'ado]³¹ のようなオック型の語は、同じカテゴリーに入ることになる。もちろん、各項目のすべてのデータ、そしてそのデータと地図の解説もアトラスに入っている。

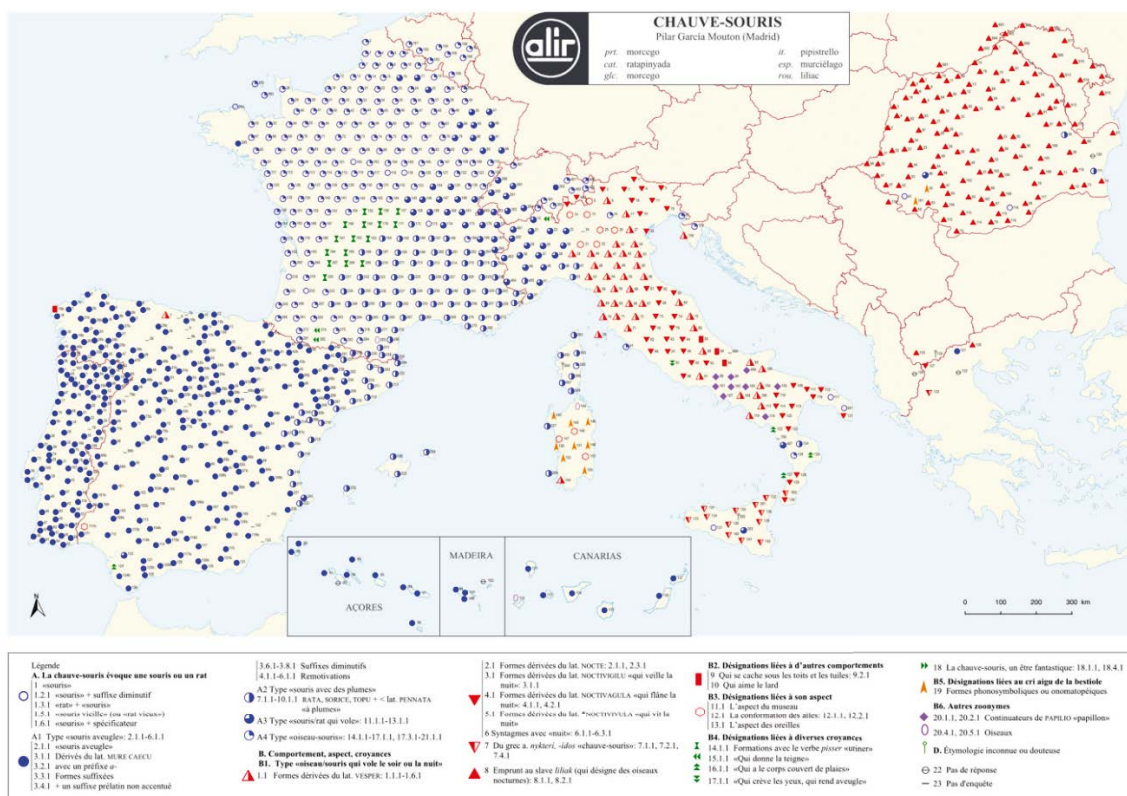


図7. ALiR、「コウモリ」の地図

²⁹ García Mouton (2019)。

³⁰ d'ɔbu 「鼠」+ biñ'udu 「羽の生えた」の複合語。

³¹ r:'atɔ 「鼠」+ pen'ado 「羽の生えた」の複合語。

ALE と ALiR は、極めて古い層を特に重視し、民族学、人類学、考古学、宗教史、さらには遺伝学までが参加する学際的な研究を展開している。今も両プロジェクトは続いている。Carpitelli (2018) は ALiR の紹介を通じ ALE との比較を行い、ALiR の語源の発見の例も挙げている。

3.4. 動機の普遍性を活かす

これまで見たように、同じ文化的背景を持つ諸言語・諸方言は表現の差を超え、動機も共有する。しかし各地域では、土地柄があると言えども、ALE、ALiR やモチベーションに基づく他の研究の結果を纏め、それを、全く関係ない遠い言語の語彙と照合してみると、共通点が圧倒的に多いことが分かる。

例えば、ニースとその周辺の方言では、オタマジヤクシのことを *caceta* や *paeleta* と言う。その言葉の由来はなんであろう。ニース地方における方言の名称を沢山集め、恣意的になっていない語形を分類すると、三つの有縁のパターンが見つかる。ロマンス諸語では他のパターンもあるが、ニース地方のデータだけを基に行われた三分類は、ALiR におけるオタマジヤクシに関するデータと解説で確認できる。一つ目のパターンは *babiòt* や *babion*³² が代表する〈カエル〉、〈カエルの子〉、〈小さいカエル〉のような名称である。他のロマンス諸語でもこういう単語はよくある(例えばスペイン語の *renacuajo*³³)。二つ目は *testardon* や *testard*³⁴ という表現で表す〈大きい頭〉である。カタルーニャにおける *capgròs*³⁵ が示すように他のロマンス語の方言でも、この動機がよく使われている。時々デズニヤンは〈頭〉だけになっている(例えばオック語の *tèsta*)。三つ目は *coa de sartaia*³⁶ や *culhiereta*³⁷ のように「フライパン」、「スプーン」など、すなわち丸く、とりわけ細長い取手がついている用具(特に調理道具)に連想する名称である。他の方言でも、この動機がよく見られる³⁸。それが分かった上で、ニース地方の方言の *paeleta* は、接尾辞がつき、<d>が脱落した *padèla* 「フライパン」、すなわち〈小さいフライパン〉、そして *caceta* は指小接尾辞のついた *caça*、すなわち〈小さいおたま〉であるということが解明される。

この三つのカテゴリーは日本の方言でも確認できる(日本言語地図、地図 221-223 を参照)。例えば、一つ目の動機とは *kaerunoko*、*kaerugo*、*hikinoko* などのタイプが一致する。二つ目の動機は *atama*、*atamabuto*、*atamadekka* とかが代表する。三つ目の動機は標準語の *otamazyakusi* をはじめ、*syamozi*、*nabehuta* を生成したと考えてもいいであろう。*Otamagaeru*、*otamago*、*gaerobo(o)zu*³⁹ のように、その中から二つの動機を取り混ぜた名

³² *Babi* 「ガマガエル」+ 指小接尾辞。

³³ *Rana* 「カエル」+ 指小接尾辞。

³⁴ *Tèsta* 「頭」+ 接尾辞。

³⁵ *Cap* 「頭」+ *gròs* 「大きい」。

³⁶ 直訳「フライパンの柄」。

³⁷ *Culhièr* 「スプーン」+ 指小接尾辞。

³⁸ 例えば、カタルーニャ語の *cullerot* (*culhièr* と同系)。

³⁹ 坊主は多分僧の剃った頭をさすであろう。しかも、子供も坊主という単語の対象物になるから、*gaerobo(o)zu* はもしかして「カエルの子」という意味も持つ。

称もある。*Atama* がついている表現も、もともと *otama* に由来するという可能性もあるかもしれない。その逆もあり得る。そうであったら、三つ目のカテゴリーに他の調理道具よりオタマのタイプが圧倒的に多いことはその類音の結果であると考えられる。

類音牽引はいくらか偶然の現象とはいっても、不思議なことに有縁性は一つの言語の中にある偶然の類音を使うことで、文化を超え、世界中で見られるデズィニャン・命名のパターンにたどり着く⁴⁰。それは、多種多様な言語の有縁を研究すると、明らかに見えるようになる。

これまでのことを踏まえると、普遍的な動機が存在する。モチベーションは言語が中心であるとは言え、文化を超える認知や世界観にアクセスするものである。人間の心理や考え方を研究し、それがどのように世界を認識し、解釈するかを研究するのに意外と有効なツールなのであるだろう。方言学に端を発したこの研究分野は、心理言語学にまで達し、認知科学の中で重要な位置を占めるようになる可能性がある。

言語学においては、世界中の言語の語源研究は今までのモチベーションの研究を活かせる可能性が高い。動機についてたくさんの情報を加えてきた西欧の研究は日本の語源学にも使えるはずである。そして日本のデータや発見により、日本人研究者もモチベーションの分野に重要な貢献することもあり得る。今のところは、入手しづらく、扱いがやや不便な大きいアトラスしかない。そのため語彙を生み出す主なパターンを概念ごとにまとめ、簡単な言葉で説明したモチベーション辞典の制作を検討する時期に来ているのではないだろうか。不可能ではない。Buck (1949) は既にインド・ヨーロッパ語辞典の中でそのような説明を与えているのである。

4. 終わりに

人間は何を考えてものに名前をつけるか。フランス・ヨーロッパを中心にするモチベーションの研究を紹介することで言語学の基礎である記号の恣意性から、大規模な国際的なプロジェクトにまで触れた。有縁性を考慮すれば、語の誕生・変化に携わるメカニズムをより一層理解できるだけでなく、方言研究を深めたり、効率的に語源を検討したり、知識を提供する新しい種類のツールを考え、作成したりすることが可能になる。

簡単なアイデアから始まり、考古学から心理言語学に至るまで、学際的な分野に触れた。このような研究は、おそらく方言学が学際性の最前線に立ち、方言学に研究者の関心を高めるチャンスとなる。ともあれ、ここでモチベーションの紹介は終わるが、この数行が日本の人々に刺激を与え、新しい研究協力の道を開くことがあれば、執筆目的は達成されたことになる。

⁴⁰ *Otama* と *atama* が「カエルの幼生」の同義語になったのは類音牽引の結果だとしても、その二つの単語はロマンス語の諸言語や他の言語でも見られる強力なパターン(カエルの幼生=調理道具、カエルの幼生=頭に特徴がある生き物)に従う。意味の面では、偶然の類音を通じても普遍的な法則があるように、有縁性は世界中の言葉の語彙創造と変化に働きかけている。よってニース弁と日本語の方言には驚くべき共通の動機が多数見つかる。

参考文献

- AA.VV. (1996-). *Atlas linguistique roman (ALiR)*, Rome : Istituto Poligrafico e Zecca dello Stato, Alessandria : Edizioni dell'Orso.
- ALINEI, M. (1980). "The structure of meaning revisited", *Quaderni di semantica* I, 289-305.
- ALINEI, M. (1984). *Lingua e dialetti : struttura, storia e geografia*, Bologna : Il Mulino.
- ALINEI, M. et al. (1983-). *Atlas linguarum europae (ALE)*, Assen / Maastricht : Van Gorcum, Rome : Istituto Poligrafico e Zecca dello Stato, Bucarest : Academia Română.
- BUCK, C.D. (1949). *A dictionary of selected synonyms in the principal indo-european languages, a contribution to the history of ideas*, Chicago / London : The University of Chicago Press.
- CARPITELLI, E. (2018). "La construction de l'Atlas Linguistique Roman. – Un exemple d'atlas interprétatif motivationnel –", *ロマンス語研究* 51, 45-63.
- CONTINI, M. / CARPITELLI E. (2022). La variation lexicale dans la zonymie dialectale, d'après les données de l'atlas linguistique roman, in : L. DE CASTRO MOUTINHO; A. GÓMEZ BAUTISTA, E. FERNÁNDEZ REI, H. REBELO, R. LÍDIA COIMBRA, X. SOUSA, (eds), *Estudos em variação linguística nas línguas românicas - 2*, Aveiro: UA Editora.
- DALBERA, J.-P. (2006). *Des dialectes au langage, une archéologie du sens*, Paris : Champion.
- DALBERA, J.-P. (2012). La dialectologie. Objet, acquis, atouts et lignes de force de son devenir, in : F. MANZANO (ed), *Actes du colloque "Mémoire du terrain : enquêtes, matériaux, traitement des données"*, Lyon : CEL/Lyon III.
- DALBERA, J.-P. et al. (1992-). *Thesaurus occitan (THESOC)*, Université de Nice / Université Côte d'Azur – CNRS UMR 7320.
- DEL GIUDICE P. (2017). *Réflexion préliminaire à l'élaboration d'un dictionnaire du dialecte niçois*, Nice : Thèse de doctorat, Université Côte d'Azur.
- GARCÍA MOUTON, P. (2019). "Les désignations romanes de la chauve-souris" (Carte et commentaire), *Atlas Linguistique Roman*, vol. 2c, Alessandria : Edizioni dell'Orso, 11-38.
- GUIRAUD, P. (1955). *La sémantique*, Paris : PUF.
- GUIRAUD, P. (1964). *L'étymologie*, Paris : PUF.
- GUIRAUD, P. (1967). *Structures étymologiques du lexique français*, Paris : Larousse.
- 国立国語研究所. 1966~1974年. 「日本言語地図」大蔵省印刷局.
- 大西拓一郎. 2022年. 「有縁化(motivation)と『世界』—方言地図にみることばと人間のせめぎ合い」東京外国大学 大学院国際日本語研究院 NINJAL ユニットオンライン講演会. 2月28日.
- RAVIER, X. (1978-1994). *Atlas linguistique et ethnographique du Languedoc occidental (ALLOc)*, Paris : CNRS.
- REY, A. (1998). *Dictionnaire historique de la langue française*, Paris : Dictionnaires Le Robert.
- SAUSSURE (DE) F. (2005 [1916]). *Cours de linguistique générale*, Paris : Payot.
- VIERECK, W. (2005), "The Linguistic and Cultural Significance of the Atlas Linguarum Europae", *Revue Roumaine de Linguistique* 50/1-2, 73-92.
- WARTBURG, W. VON. (1922-). *Französisches Etymologisches Wörterbuch : eine Darstellung des galloromanischen Sprachschatzes (FEW)*, Bonn : Klopp, Leipzig : Teubner, Bâle : Zbinden.